

令和 6 年度
国立環境研究所福島地域協働研究拠点
ステークホルダーとの対話のための会合
報告書

2025 年 7 月

国立環境研究所 福島地域協働研究拠点

令和 6 年度国立環境研究所福島地域協働研究拠点ステークホルダーとの対話のための会合

国立環境研究所 福島地域協働研究拠点

1. 背景

- 国立環境研究所（以下、「国環研」）は 2016 年 4 月に福島県三春町の環境創造センターに福島支部を開設し、災害廃棄物や放射性物質に汚染された廃棄物の処理処分、放射性物質の環境動態や生物・生態系への影響、被災地の復興まちづくりなど、被災地の環境回復と環境創生、災害に備えた地域づくりに関する研究に取り組んできた。
- 2021 年 4 月に福島支部を「福島地域協働研究拠点」（以下、「福島拠点」）と改称した。以降、福島拠点では「地域協働推進室」を立ち上げ、地域で活動する皆様との協働を進めて、上記の環境研究の成果にもとづく具体的な地域貢献を目指す地域協働研究に取り組んできた。広報活動、地域との対話活動、地域協働型の研究活動を一体的に推進するなかで、近年は安積黎明高校様との協働による「環境カフェふくしま」、特定非営利活動法人しんせい様・あさか開成高校様との協働による「山の学校」など、地域協働の取り組みの輪を拡げてきた。
- 国環研は現在の中長期計画期間（2021-2025 年度）の終了を控え、現在、次期中長期計画（2026 年度以降）を検討している。次期中長期計画において、福島拠点の中長期的な運営戦略、地域協働研究の今後の展開を検討するため、福島県内においてさまざまな分野でご活躍されているステークホルダーの皆様をお招きして、本企画「ステークホルダーとの対話のための会合」を開催することとした。
- なお、本企画は現在の中長期計画検討、地域協働推進室の立ち上げを背景として令和 2 年度（令和 3 年 3 月 19 日（金））に実施しており、今回は 2 回目の開催となる。

2. 本会合の目的

- ① 被災地の環境回復と環境創生、災害に備える地域づくりに対する課題や期待について、ステークホルダーの皆様と意見交換をすること
- ② ステークホルダーの皆様との意見交換を通じて、令和 3 年度（2021 年度）以降、福島拠点が推進してきたステークホルダーの皆様との連携・協働による取り組みを振り返り、その意義および課題を確認すること

- ③ ステークホルダーの皆様のご意見・ご助言を、今後の国環研および福島拠点における研究計画、協働戦略、ステークホルダーの皆様との協働の方針策定に反映するとともに、今後のステークホルダーの皆様との協働におけた具体的なアクションにつなげる

3. 開催日・場所・開催形式

【日時】令和7年1月28日（火）13:00～15:30

【会場】福島県環境創造センター本館・2階会議室（〒963-7700 福島県田村郡三春町深作10-2）

【開催形式】会場・対面にて開催

※国環研・つくば本部の研究者などのオンライン参加も受け付ける、ハイブリット会議の形式で実施

4. プログラム

開始時間	分	内容
13:00	5	開会挨拶
13:05	10	国立環境研究所福島拠点における地域協働研究のご紹介
13:15	5	本会合の趣旨説明
13:20	15	参加者（ステークホルダーの皆様・国立環境研究所福島拠点）による自己紹介
13:35	50	第一部：ステークホルダーの皆様による議論
14:25	10	休憩
14:35	50	第二部：ステークホルダーの皆様と国立環境研究所福島拠点の研究者との意見交換
15:25	5	まとめ、閉会挨拶
15:30		閉会

●第一部では、ファシリテーター（五味馨〔国立環境研究所 福島地域協働研究拠点 地域環境創生研究室 室長〕・ディスカッサント（林誠二〔国立環境研究所 福島地域協働研究拠点 研究グループ長〕）の進行のもと、以下の議題について、6名のステークホルダーからご意見を伺い、議論を行った。

- ① 福島に拠点を置く国の環境研究機関として、わたしたち国環研・福島拠点はどのような役割を果たすべきでしょうか。また、わたしたち国環研・福島拠点にどのような期待をお持ちでしょうか。

- ② 福島環境や復興に関して、様々なステークホルダーが連携・協働して取り組む必要がある活動のテーマは何でしょうか。また、福島において様々な立場や意見をもつステークホルダーが連携し、協働するためには、どのような工夫や仕掛けが求められるでしょうか。

●第二部では、第一部の議題および討論の内容をもとに、座談会形式にて対話・意見交換を行った。第二部には、ステークホルダー6名および第一部の進行を担当した五味・林に加えて、国環研から福島拠点の研究者4名（以下に記載）、森口祐一理事、根本桂三拠点長、大原利真客員研究員が参加した。

- ・ 生島詩織（環境影響評価研究室）
- ・ 大西悟（地域環境創生研究室）
- ・ 田中悠平（廃棄物・資源循環研究室）
- ・ 中村省吾（地域協働推進室）

5. 情報公開

●会合メンバーのお名前は公開とした。会合の内容については、発言者が特定されない形で報告書を作成して、福島拠点のウェブサイト等のweb媒体で公開することとした。本報告書がその資料である。

●当日は、記録のため、録音や録画をした（公開はしない）。写真は福島拠点のウェブサイト等のweb媒体や報告書に掲載する予定である（掲載を望まない方には申し出ていただく）。本会合の開催に先立ち、以上の点をステークホルダーの方々にご確認いただいた。

6. 参加者（ステークホルダーの皆様および国環研）

- 本会合には、福島復興においてさまざまな分野で活動するステークホルダー6名にご参加いただき、被災地の環境回復と環境創生、災害に備えた地域づくりに対する課題や期待についてご意見いただいた。
- 本会合に参加いただいたステークホルダーの方々は以下の通りである。福島県内の環境・復興に係る政策・活動に取り組む方々（企業、市民、NPO、教育関係者等）を、性別・年齢・地域等になるべく偏りがないように考慮して選考した。
また、令和3年度（2021年度）以降、福島拠点と具体的に連携・協働して活動・研究

を進めていただいているステークホルダーの皆様にお声かけをした。

岩淵 良太（特定非営利活動法人会津みしま自然エネルギー研究会 理事長）

川越 清樹（福島大学 共生システム理工学類 教授）

菅波 香織（未来会議 事務局長）

富永 美保（特定非営利活動法人しんせい 理事長）

南郷 市兵（大熊町立学び舎ゆめの森 GM [校長・園長]）

山口 松之進（郡山観光交通株式会社、孫の手トラベル 代表取締役）

※敬称略。会合でのステークホルダーの皆様のご発言は、個人としてのご発言であり、団体・組織を代表するご発言ではないことに留意。

- 国環研からの参加者・スタッフは以下の通りである。※敬称略

担当業務	名前	所属等
開会挨拶	森口 祐一	理事
閉会挨拶	根木 桂三	拠点長
司会	中村 省吾	地域協働推進室 主任研究員
ファシリテーター	五味 馨	地域環境創生研究室 室長
会場管理（進行管理・受付）責任者	辻 岳史	地域協働推進室 主任研究員
会場管理（進行管理・受付）	伊藤 由美子	地域協働推進室 高度技能専門員
会場管理（進行管理・受付）	常盤 達彦	地域協働推進室 高度技能専門員
会場管理（進行管理・受付）	日下部 直美	地域協働推進室 高度技能専門員
会場管理（進行管理・受付）	吉村 篤彦	総務企画課 総務企画係長
会場管理（進行管理・受付）	成田 瑞穂	総務企画課 総務企画係 係員
機材設定・管理	委託業者担当者	株式会社RKB
PC操作補助	常盤 達彦	地域協働推進室 高度技能専門員
撮影	志賀 薫	広報室 高度技能専門員
国環研研究紹介・地域協働研究紹介	林 誠二	研究グループ長
趣旨説明	辻 岳史	地域協働推進室 主任研究員
討論者（第二部）地域環境創生研究室	大西 悟	地域環境創生研究室 主任研究員
討論者（第二部）地域協働推進室	中村 省吾	地域協働推進室 主任研究員
討論者（第二部）環境影響評価研究室	生島 詩織	環境影響評価研究室 研究員
討論者（第二部）廃棄物・資源循環研究室	田中 悠平	廃棄物・資源循環研究室 特別研究員
第一部・第二部：コメント	森口 祐一	理事
第一部・第二部：コメント	大原 利真	客員研究員
第一部：ディスカッサント	林 誠二	研究グループ長

- 上記スタッフの他、境優（環境影響評価研究室 主任研究員）が参加した。

- オンライン参加者は約 20 名であった。



第一部・ステークホルダーの皆様との意見交換の様子



第二部・ステークホルダーの皆様と福島拠点研究者の座談会の様子



発言する岩淵良太氏（特定非営利活動法人会津みしま自然エネルギー研究会）



発言する川越清樹教授（福島大学）



発言する菅波香織氏（未来会議）



発言する富永美保氏（特定非営利活動法人しんせい）



発言する南郷市兵氏（大熊町立学び舎ゆめの森）



発言する山口松之進氏（郡山観光交通株式会社・孫の手トラベル）

7. 結果：本会合でステークホルダーの皆様からいただいたご意見

第一部ならびに第二部でステークホルダーの皆様からいただいた意見は以下の通りである。いただいた意見については順不同でまとめた。

読みやすさを考え、発言の主旨となる部分をコンパクトに整理した。また、個々の意見の発言者が特定できないようにするため、一部の固有名詞は省略してある。

なお、下記のなかには、本会合開催後の振り返りの過程で、ステークホルダーの皆様からいただいたご意見・コメント等が含まれている。

【第一部】ステークホルダーの皆様による議論

● ステークホルダーの皆様からのご意見

論点1「子どもたち（次世代）の学びに対する貢献」

・気候変動・脱炭素・エネルギーといった世界レベルでの大きな環境の変化と、私たちが住む地域の暮らしが具体的にどう関わっているのか/いくのかを、子どもたちに伝えたい。未来を見据えた環境変化にたいして、私たちの地域の暮らしはいかに適応できるのか。しかし、このことを子どもたちにうまく伝えられないとも感じており、国環研・福島拠点には一緒にどのように伝えるかを考えてほしい。**子どもたちにとって身近な暮らしの課題（野生生物が増えていること、ごみ問題など）を題材にして、それが様々な環境問題につながっていることを示すことができる**、子どもたちの関心・意識を高められるのではないかな。

・学びは本来楽しいものなのに、学校教育の課程では、その楽しさが失われていく残念な状況があるとも感じている。国環研・福島拠点には、**学校教育の教科の枠にとられない、わくわくする、楽しくなるような環境問題の学び方、学びの仕組みを提案**してほしい。自然体験を企画・実施しているような団体、フリースクールなど、同じような問題意識を持っている団体とのコラボレーションも有効だと思う。例えば、子どもたちの暮らしのど真ん中であって、彼らが興味関心をもつこと（家の外にいるアリをつかまえてきて飼う、ゴキブリが家のどこに生息しているのかなど）から、子どもたちの学びが深まるきっかけがあるのではないかな。

・現在検討されている次期学習指導要領においても、引き続き、総合的な探求の時間（探究学習）は一層推進される見込みである。**今後、生徒一人ひとりの関心に則した「探求の個人化・個性化」（個別探究）が進む**と見込んでいる。この動きが進むと、子

どもたちの興味関心、研究分野はばらばらになっていくため、学校のマンパワーだけでは対応が難しくなる。そこで国環研・福島拠点の研究者には、**個人化・個性化する生徒の探究学習のニーズに対応する役割**が期待されるのではないかな。

・子どもたちも様々な発達段階・科学への理解度・学力レベル等に分かれる。すでに国環研・福島拠点で取り組んでいるものもあるが、**間口を広くサイエンスの面白さを体感できるような講座から、探究・研究に没頭している子どもをさらに加速させていくような高校生の探究・研究のメンター支援まで、それぞれの対象・段階に応じた働きかけ**が考えられるのではないかな。

論点 2 「国環研・福島拠点が蓄積している環境研究の知見・データの活用」

・国環研・福島拠点は福島第一原発事故による放射性物質の飛散という特異な環境下で、福島でしか得ることが出来ない貴重な研究データを 10 年間以上蓄積していると認識している。これは財産であり、この財産を、民間企業などのステークホルダーがいかに関用できるかを提案してほしい。そのために、もう少し、**企業が福島拠点の研究内容を知る機会、学ぶ機会をつくっていただければありがたい**。企業側も、福島環境・復興について何を伝えなければならないのかという点について、パターン化されたコンテンツではなく、しっかりストーリーを持って、何を伝えたいのかということをも明確に示す必要がある。そうすれば、企業と国環研・福島拠点は win-win の関係になれると思うし、そうなれる形を考えていきたい。

・国環研・福島拠点は、これまで蓄積してきた 10 年間の貴重な研究データをもとに、「福島がこんなに可哀そうだ」を伝えるというためにはなく、**福島拠点が蓄積してきた研究の知見から、「世界の環境共生のあるべき姿」は何なのか？福島14年から見える「自然・地球の復元力の力強さ」の一端を示していただき、「自然は人間を凌駕する存在」であることを多くに人に示していただきたい**。それこそが「なぜ今環境が大事なのか？」を経営者層に訴え、「環境をビジネス」を組み込むために必要なことである。

・「無いものねだり」ではなく「あるもの探し」という発想が重要。**国環研・福島拠点に「すでにある宝物」を活用**してもらいたい。

論点 3 「地域社会における国環研・福島拠点の立ち位置および役割」

・国環研・福島拠点のタグライン（環境の“知”を、地域とともに。）に強く共鳴した。

未来につながる環境の“知”を地域とともに築き、世界各地の地域づくりの礎となるようにという国環研・福島拠点のタグラインに込められた理念は、研究と地域づくり、さらにはその先の世界の科学・社会への貢献を真正面から目指すものであると思われる。ぜひ引き続き、タグラインに込められた学びと地域づくり、そして研究の相乗効果を模索していただきたい。

・国環研・福島拠点には、長い時間軸と空間軸で社会のあり方を構想する役割が期待される。環境研究所として自治体や地域の方々と協働する際は、自治体や地域の様々なステークホルダーにとっての「便利屋」「御用聞き」にならないでほしい。国環研・福島拠点にはサイエンスの立場をぶらさずに長期的な視点で社会のあり方を構想しつつ、協働のパートナーとして、地域の政策や対話に参画してほしい。

・福島県は浜通り・中通り・会津と三つの地方があり、気候も生活様式も異なる。また自治体ごとにも抱えている地域課題が異なる。国環研・福島拠点には、こうした福島県という地域の多様性をふまえたうえで、特定の地域に留まるのではなく、できる限り多様な地域を網羅する研究・活動を検討してほしい。

・国環研・福島拠点は、浜通り・中通り・会津に散在している地域をつなぎ、ネットワークをつくる役割を果たしてほしい。これは国環研・福島拠点だけではなく、周辺他機関とも連携してネットワークづくりに取り組むことが有効ではないか。

・「私たちの課題は私たちだけの課題だけではなく地域の課題、日本の課題、社会の課題、地球規模の課題につながっている」ということが実感できるような学びを提供していただきたい。

・山の学校を通して、「農園の課題」は「地域の課題であること」、「地域の課題」は「日本社会の課題であること」、「日本社会の課題」は「地球規模の課題であること」がよく理解できるようになった。山の学校の企画運営を通じて、行動変容につながるまで、意識が変わったと自覚している。国環研・福島拠点には、私たちひとり一人がいま、抱えている自分の課題が、地球規模の課題とどうつながるのか？を実感できるように、伴走をつとめて欲しい。10代の学生だけではなく、理科が嫌いだった社会人だった自分のような大人のなかにも、学びを必要とし、学びを欲している人はいるのではないか。

・三島町の学校はとても小規模で生徒の数も少ない。このような小さな環境・コミュニティで、三島町の子どもたちは育っていく。どうしても小さいエリアでしか活動が

できない。そこで、国環研・福島拠点や本日のステークホルダーの皆様が構築してきたネットワークを活用させていただきながら、三島町の生徒らが大熊町の学校、しんせいの障害を持った方々などと連携して活動する機会を作れると、彼らが視野を広げるきっかけになるのではと思う。国環研・福島拠点の研究・活動を一つの地域だけで完結させるのではなく、国環研・福島拠点が築いてきた地域社会のつながり、行政との関わりを活かして、様々な世代の方、大人から子どもまで交わるような連携・協力の機会をつくること・活動を展開することが有効ではないかと思う。

・学びを欲しているのは決して子供たち・学生だけではない。子どもたち・学生（小学生・中学生・高校生・大学生など）・社会人・高齢者・障がいをもっている人など、多様な立場の人々と研究者が協働で環境や社会についての学びを深められるような実践事例や研究事例をつくっていただきたい。

・多様な立場の人たちが環境や社会の課題・問題について意見交換をしたり、対話をしながら答えを出したりしていく場、障害をもっている人など弱い立場の人もきちんと自分の意見がそこで堂々と言えるような場を作っていきたい。ぜひ引き続き、国環研・福島拠点の力を貸していただきたい。

・国環研・福島拠点は環境や福島の復興・再生に関する研究の情報を積極的に発信している。しかし、まだ、一方通行の情報発信が多いのではないか。住民として受け身になってしまっていることが多い。難しいと思うが、住民参加型の情報発信を心がけてほしい。そうすることによって、国環研・福島拠点も住民の取り組みを理解しやすくなるのではないか。住民が受け身だけで終わらずに交流できるような活動、共同研究を構想してほしい。

論点 4「福島環境や復興に関して、様々なステークホルダーが連携・協働して取り組む必要がある活動のテーマ」

・気候変動は多くの人が今、強く関心を持っていると感じているが、あまりにも問題のスケールが大き過ぎる。私たちひとり一人が何をできるのか、何に取り組めるのかとがよく分からない。気候変動と一人ひとりの生活に根ざした部分をつなげて考えることが大事。『「気候変動」「ゼロカーボン」と〇〇（ごみ問題など）』などの問題の提示が有効ではないか。

・いま福島県では県をあげてゼロカーボンを推進している。ゼロカーボンと各地域の身近なものをターゲットにして、様々な仕掛けを考えることができるのではないか。

・利害の対立があるなかで、どのように将来世代の利益や広い社会・世界への利益のために合意を形成していくのかという課題に取り組む必要がある。流域治水、気候変動、中間貯蔵施設の将来的なあり方など。社会科学の分野になるかもしれないが、歴史に学ばず、科学に学ばず、体当たりで行政がやったところで敗北は目に見えているため、どうあるべきなのかということを科学的に、人類全体で考えていかないといけない。合意形成というのは大変な難題であると感じている。

・災害の記憶、教訓の伝承。水俣などの公害、様々な被災地における災害の記憶の伝承について。

・福島復興の指標に関する研究や復興指標づくりに関する活動。被災地域の持続可能なあり方を考える際に、どのようになれば復興が終わるのかという道筋を示すことは非常に重要であり、さまざまな立場、意見を持つ方々が連携して協働しなければならない、大きな課題であると認識している。

・福祉の視点について。いまの福島・浜通り地域には福祉が必要な方々がたくさん移住してこられている。福祉と教育の連携・協働が必要になっている。国環研・福島拠点をはじめ研究として福島・浜通り地域の福祉の課題に取り組む余地があれば、検討してほしい。

論点 5 「科学の楽しさ・面白さの発信」

・子どもたちにとっても大人にとっても、楽しいことはたくさんある（ゲームなど）。そこに負けないような仕掛けが求められる。環境や社会を科学することの面白さを引き出すにはどうすればよいかを、様々な方々と話し合いながら考えて、実践していくことが大事。

・国環研・福島拠点が発刊した漫画（「中虎町役場政策企画課ゼロカーボン推進係！」）の取り組みはとても素晴らしいと感じた。情報発信をしたとしても受け手が情報を受け取ってくれなければ、それは発していないのと一緒にになってしまうため、ぜひ引き続き、こうした漫画を通じて科学の楽しさ・面白さを伝えるような情報発信を継続していただければと思う。

・近年は、さまざまな職業を漫画化した面白いコンテンツがたくさん出ている（ケースワーカーの仕事を題材にした『健康で文化的な最低限度の生活』など）。また漫画や本でなくても、ネット上でコンテンツをどんどん出していった、ヒットしたものを

版などの既存の媒体でまとめて発信していくコンテンツ制作のスタイルもある。コンテンツ制作のプロに研究者や、福島をフィールドにした研究の仕事を描いていただくのも、広報・PRの側面からみれば面白いのではないかな。

・放射性物質・放射能などの科学的な情報や知見を、一般の方に提示する「順番」が大事である。木戸川の鮭の遡上に着目して Food camp を企画した際の経験から、楽しいこと・美味しいことを先に提示して、科学的な情報・知見は後に提示すると効果的だと考えている。最初からデータを出すと、一般の方々はちんぷんかんぷんになってしまうが、楽しい・美味しい体験をした後からデータを出すことによって、一般の方も環境や社会の課題・実態について納得してもらえと思っている。「楽しい・美味しい」という手段を入り口にして、国環研・福島拠点が蓄積してきた研究データというエビデンスを加えることによって、「単なる感動」ではなく、「次の行動変容をもたらす感動」を提供することができるのではないかな。

・国環研・福島拠点が積み重ねて、実施している研究を、お客さん（一般の方々）というお金を払う人のニーズを常に考えている企業の視点から見たときに、「この研究、面白いから、こういう伝え方ができませんかね/できるんじゃないんですか」という提案ができると思う。まずは国環研・福島拠点の研究を企業が知る機会を作っていたら、様々なアイデアの創出や連携による活動につながるように思う。

・研究者の学び方のプロセス（仮説を立てる、検証するなどの手法）を、子ども・大人にわかりやすく伝える取り組みも面白いと思う。

● 国環研・福島拠点からのリプライ

・国環研・福島拠点が地域にとっての「便利屋」「御用聞き」にならず、サイエンスの立場から地域の政策・対話に参画するために、国環研・福島拠点がその地域の将来がどうなるのかということを地域のステークホルダーに提示したうえで、そこに共感してもらえるような取り組みがとても重要。その地域の将来像にむかって、今こういうことが必要なんだということを、話し合いを通じて、研究者も地域のステークホルダーもお互いに納得した中で進めていくことがとても必要である。

・子供たち（次世代）の学びに対する貢献については、国環研・福島拠点としてはただ単に研究に関する情報や知識を垂れ流しにするのではなく、子どもたちがクエスチョンを見つけるきっかけ、「こんなことをもっと学びたい」と思わせるような仕掛けを考えることが重要である。

・国環研・福島拠点としては、総合的な探究の時間の支援に関わることで、より多くの学生が研究に関心を持つようになってもらいたいと考えている。多くの子どもたち・学生に「研究者も仕事として楽しいかもしれない」と思ってもらうことが、日本の科学力の向上につながっていくのではと考えている。このような観点から、**子どもたち・学生の学びへの支援についても、国環研だけではなく、福島大など地域のさまざまな研究機関、高等教育機関と一緒に取り組んでいければ**と思っている。

・国環研・福島拠点としては、これまで特定の地域に深く関わるなかで、環境や復興・地域再生に関する様々な課題をどのように解決していくのかというスキルを着実に身に付けてきたと考えている。今後の課題は、**福島県の特定の地域で培ったスキルを、福島県内の他地域や福島県外の地域における課題解決にどのようにつなげていくのかを、その方法を具体的に考えることだ**と思う。そして、その方法をステークホルダーの皆様と共に、どうやって学び合い、確立していくのかということだと考えている。

・研究者である我々が、**地域社会の皆様、ステークホルダーの皆様から学ばなければならないことがたくさんある**。地域社会の皆様、ステークホルダーの皆様と共に学んでいく、共に社会を良くしていくことを目指しながら、本来の学びの楽しさを一緒に感じていければよいと思う。

・気候変動の影響は地域においてすでに確実に及んでいる。気候変動の悪影響が及ぶのは避けられず、それをなるべくうまく、どうやってかわしていくのか、どのように私たちの生活を変えていかなければいけないのかという課題がある。この課題を私たちは「適応」と呼んでおり、気候変動の研究として非常に重要なところであり、国環研の別の部署（気候変動適応センター）が研究や情報発信に努めている。**本日、ステークホルダーの皆様から提示していただいた福島県環境・復興に関する課題は、国環研における適応の研究・活動にも共通する**ように思った。

・2021年3月に前回のステークホルダー会合が開催された際のキーワードは放射能汚染の問題だった。そこから4年が経過し、本日のステークホルダーの皆さんの議論を聞いていると、放射能汚染の問題というのは根底にはあるとはいえ、それに加えて、**未来志向の持続可能な地域づくりを福島県でどう進めていくのか**というところに、問題意識や力点が移ってきているという認識を持った。**福島県における状況変化に則して、私たち国環研・福島拠点も、それに応じて変化をしていかなければならない**と感じた。

・2016年に国環研・福島支部が発足して以来、私たちは一貫して地域協働を希求してきた。地域協働は、引き続き、私たち福島拠点の生命線だろうと考えている。いま、福島拠点にいる我々が考えなければならないのは、**福島県で活動する環境研究機関として、**

何のために地域協働するのか、なぜ地域協働の必要があるのか、地域協働をどのように進めていくのか。これらの点を考えるということが重要ではないかと考えている。福島でどのように社会変革していくのかというのは大変重要な課題であり、どのように次世代層の育成をしていくのかというのも重要なポイントだと思う。これらをするためには、地域協働というプロセスを避けて通れず、それを研究することこそが地域環境研究である。ここでしっかりと成果が出せれば、論文にもなるし、研究成果としても世界に発信できると思う。国環研は「福島でこんなにいいことをやっているんだよ」ということを対外的にアピールできると思う

・国環研・福島拠点が進めている地域協働は、単にアウトリーチの活動ではなく、まさにわれわれの研究になる。日頃、国環研・福島拠点の研究者と共に活動していただいているステークホルダーの皆様には、活動を研究として仕立て上げる取り組みをしていただければと考えているため、引き続き、様々なご協力をいただきたいと考えている。またこの地域協働の活動そのものは、我々研究者の人格形成・人間形成にもなっている。研究者には、地域協働の活動を難しい、できない、得意でないと思っている人ももちろんいると思うが、少しでも関心があれば、ぜひ地域協働研究と一緒にやっていっていただければと思う。



第一部・ステークホルダーの皆様との意見交換の様子（会場全景）

【第二部】ステークホルダーの皆様と国立環境研究所福島拠点の研究者との意見交換

第二部では、第一部の議論をうけて、国環研・福島拠点の研究者から、ステークホルダーの皆様にご質問をさせていただきました。ここでは、研究者の質問内容と、ステークホルダーの皆様のご回答を以下に記す。

・国環研研究者

国環研・福島拠点は、放射能汚染や放射性物質対策など、原子力災害の負の側面・ネガティブな側面も研究対象として、知見を蓄積してきた。こうした負の側面・ネガティブな側面も一般の方々に関心を持っていただくために、面白さを引き出すという側面も重要だと感じた。原子力災害の負の側面・ネガティブな側面に焦点を当てて情報発信したり、一般の方々に参加いただくイベントを企画運営する際に、留意した方がよい点などはあるか？

・ステークホルダー

放射能汚染や放射性物質対策の問題は確かにややネガティブではあるが、国環研・福島拠点が集めたデータや知見は、安全性やリスクを証明するものだとして理解している。ガティブな情報がネットに流れると歪曲されて伝わってしまう側面があるが、**国環研・福島拠点のようなしかるべき人が、しかるべきタイミングで、しかるべき伝え方をすれば一般の方々も納得をしていただけるのではないかと**考えている。先ほど申し上げたように順番（楽しい・美味しいが先、データは後）が大事であり、そこさえ間違わなければ、一般の方々への情報発信や参加型イベントの企画運営はうまくいくと思う。あとは情報の受け手、参加してくれた人が、それぞれがSNS等で発信してくれるため、それを機にまた新しい仕掛けを考えることが重要。

例えば、大学生を対象に浜通り沿岸の釣り体験ツアーを企画した際に、富岡漁港から釣り漁船を出し、船長さんに助けていただきながら、まず楽しく釣りをした。魚が釣れると参加者は喜び、どのような餌を使えば釣れるのか、どのような海で環境で魚が釣れるのかなどに関心をもつ。そこで、海にどのように放射能の影響が出ているのかなどの情報を聞けば、おそらく、理解・納得してもらえるのではないかと考えている。

楽しいことを企画する際に重要なのは、「自分が楽しいこと」を企画にすること。頭でネットを調べて「今、これがブームだから、じゃあ、ツアーをつくってみよう」といっても、それは失敗する。自分が好きで楽しければ、面白い企画になるため、自分が企画内容に関心を持つかどうかを一番のポイントにするとよい。この時、企画で取り扱う対象が、世間的に有名かどうかはあまり関係ない。

・ステークホルダー

「山の学校」のモットーは「ときどき、先生。ときどき、生徒」。参加者の皆さんが先生にもなったり、生徒にもなったりというところで、お互いが自分の知らない世界の人たちから学び、交流や対話をしたりする。このことを、参加される皆さんがとても楽しまれているのではないかと考えている。

「山の学校」は、ファジーであるということを大切にしている。その人の肩書、立場、年齢、性別にこだわらず、曖昧にすること。発言や意見、正直な気持ちを堂々と伝えても誰も「それは違っているよ」とか「そんなことはないよ」ということを言わず、相手の価値観や、住む世界を理解しようとする。これらのことを大切にしている。このような姿勢で様々な方々と対話・交流することで、場の雰囲気は非常に和やかになり、わくわく、楽しさというのが出てくるのではないかと考える。

・国環研研究者

研究者として、福島を原子力災害からの復興モデルであると世界からいわれるようなところにしたいという夢がある。20年後に中間貯蔵施設が地元の方にお返しされるという中で、いま、最前で活躍されている方々から私たち世代(30代)、に引き継がれるなかで不安がある。それは、少子化で人材が減ってきているということ。福島の復興に携われる人材を、仲間をどのように作っていきけるのかという不安がある。

浜通り・中通り・会津と地方があるなかで、大学や研究所がどのように人材の確保や、人材の流動性担保をやっていきけるのだろうか。

・ステークホルダー

大学の学生をみても、卒業して福島にいたいと思う人は少ないというのが現状。しかし、自分の志向に合わせて福島とは違うところに行ったとしても、戻ってくるというパターンもある。一度、福島を出て、外を見て、感じて、広い知見を身に付けて、また福島に戻ってきていただくというようになればよいと考えている。

人口減少は福島だけではなく、日本全体の問題であり、地域間で人の取り合いをするのは望ましいことではない。福島で生まれ育った人たちの記憶に残るような印象というのは教育の中で教えて、あの頃が良かった、あの頃を再現したいなどの思いで、また福島に関わってもらえるような形でもいいのではないかと考える。

福島のことを知って、移住してくれる人はとても有難いが、交流人口・関係人口・多拠点居住でも大切な人たちである。あまり堅苦しく考えず、しっかりと福島が印象に残るような教育をしていくことが大事ではないかと考える。

・ステークホルダー

福島のような地方の顔の見える関係性に安心感や居心地の良さを感じられる方もおり、

そういう方にとっては福島の魅力も感じられるのではないか。都会で疲れた方が福島に立ち寄ったときに安心できたり、人のつながりがすごくいいという人がいたりしたら、そういう方とのつながりを作っていくことが大事。福島に魅力を感じてくれる人の居場所が緩くとも複数、数珠的にできて、その時の状況によって選べる環境が整っていくといいのではないかと思う。

・国環研研究者

大熊町・学び舎ゆめの森では、個性化していく教育（探究学習）に対応する際に、どのような工夫を重ねているのか。あるいは、どのような対応の難しさがあるのか？

・ステークホルダー

生徒に「これをやれ」と言っても創造性は生まれてこない。学び舎ゆめの森、ふたば未来学園の教育では、学びの対象や目標を大きな社会の文脈、方向性の中でどのように位置づけられるかを、エビデンスとともに示すことを心掛けている。生徒にとって学校や地域社会で学ぶことは、初めてのチャレンジであることが多く、生徒は新しい変革に向きあっている。そのため、生徒一人一人がハンドル、イニシアチブを握っていく開拓者となってほしいと考えている。そのような難しい課題に生徒が向きあうためには対話が不可欠であり、生徒と教師が対話して一緒に新しいものをつくっていくということを意識している。そうすると、生徒も楽しんでくれる。自分（教師）が楽しければ、みんな楽しいというわけではないかもしれないが、そのような関係を目指している。子どもたちが楽しそうに探究学習に取り組んで、立派に巣立って行って、そして、いまや大熊の学校にはふたば未来学園の卒業生も勤めている。ふたば未来学園で防災をテーマに探究学習をやった生徒が大学を卒業した後、大熊町役場（環境対策課）に戻ってきて防災の担当になり、いま、私と避難所マニュアル一緒につくっている。

・国環研研究者

次世代層・子どもたちの学びへの貢献について、小中学生など低学年になればなるほど、働きかけ方が難しいと感じている。国環研・福島拠点の研究者が小学生とコミュニケーションを取るとしたら、どのような方法があり得るだろうか？

・ステークホルダー

子どもに興味をもってもらうには、研究者の個性の部分伝えていくのが有効だと思う。研究者が本当に面白いと思っていること、知識を伝えていけば、子どもたちは必ず飛びつく。まずは、研究者が楽しんでいる姿を見せて、伝えることが大事ではないか。それを環境や地域社会に必ずしも結び付けなくても、「ああ、こんなお兄さん、いたな」というレベルで子どもたちの印象に残れば、それが後々「そういえばそんなことがあっ

たな」と、彼らの学びにつながるがあると思う。教育の一環で行う活動も、半分は、研究者が子どもたちと楽しい思い出を一緒につくれればいいのではないか。研究者が教育に関わるのは学校外での活動であることが多いと思うので、まずは楽しむことが一番大切じゃないかと思う。

・ステークホルダー

幼児教育では「子どもたちを育てるには、面白がらせてくれる変なおじさんが一人いれば、それでいい」という言葉がある。研究者が「これ面白くない？」と言い、没頭している姿が、子どもたちの興味関心を刺激するはず。子どもたちに、「何だ、このおじさん」と思わせればいいのではないかと思う。

注：ストックホルム大学のダールベリ等の著書で、幼児教育の都として世界で燦然と輝くレッジョエミリアの創始者マラグッツィの言葉を紹介している一節。子どもたちの内発的な関心や探究心を引き出していく幼児教育のアプローチは、学校教育においてもこれからますます重要で、探究が個性化していく中で全ての分野に教師が精通することがあり得ないなか、研究者が「変なおじさん」としてのロールを発揮していくことに可能性があると感じる。

退屈は教育にとって最悪の敵だ。マラグッツィはしばしばバachelard (Bachelard, G.)に触れて「上手に育てるには、ポケットの中に道化師をしのばせておかねば」と言っていた。またBronfenbrenner (Bronfenbrenner, U.) を引用して、「上手に育てるには、驚かせてくれる変なおじさんが、少なくとも一人は周囲に必要だ」と述べていた(Dahlberg, 1995:16)。

ダニラ・ダールベリ/ピーター・モス/アラン・ペンス 著、浅井幸子 監訳『「保育の質」を超えてー「評価」のオルタナティブを探るー』，ミネルヴァ書房，2022，P213

・ステークホルダー

総合的な学習の時間に関する学術的な議論においても、問いや仮説検証などの「探究の作法」を学ぶのはナンセンスだと指摘されている。とにかく、**子どもたちが探究せざるを得ない「衝動」がまずあって探究をしていくのだと指摘されている**。子どもたちの探究せざるを得ないという「衝動」を引き出すことを、いかに小さな頃から重ねていくことが大事であると言われている。

これは理念としては正しくても実践はまだ伴っていない。**国環研・福島拠点の研究者は、さまざまな分野で、自身の興味や問い、好きなことを追究されていると思う。そういった在り方、生きざまをこれからの子どもたちにぜひ伝えていただきたい。そうすることで福島がフロンティアだと思って、県外に出た後でまたここをフィールドとして帰っ**

てくる子どもたちも出てくるのではないと思う。

・ステークホルダー

子どもたちのだけではなく、大人も創造的な学びや新しいものは、やはり対話がきっかけで生まれてくると思う。研究者もあまり研究の世界に没頭せずに、様々な方との対話をするのが大事だと思う。対話をしないと自分の正義しか分からず、周りの人々の正義が見えなくなってしまうことがある。

・ステークホルダー

福島県・浜通りには、子どもにとっても大人にとっても、科学の楽しさ・面白さを気軽に体験できる身近な施設がほとんどない。浜通りの子どもたちは家庭の格差もあって、自分ではなかなか科学館がある中通りや、県外には行けない。

・ステークホルダー

Food Camp は生産者をヒーローにするというのが原点にある。6 次産業化というが、農家さんがいいものをつくるだけでなぜ褒められないのかが疑問であるし、農家さんが作ったよいものを加工したり、売ったりするのは得意な人がやるべき。そういう思いで Food Camp を企画・実施している。

国環研・福島拠点の研究者も、本業は研究なので、全て自分でやる必要はない。引き続き研究に没頭していただいて、時折苦しくなったときに我々と交流をしていただいて、我々の視点から研究のすごいところを評価させていただけると、研究者とは違う視点からアイデアが生まれてくるのではと考えている。

● 国環研・福島拠点からのリプライ

・我々国環研は様々な環境問題を研究しており、気候変動のようなグローバルな環境問題も研究するが、福島では地域に密着した環境問題を研究している。「環境」という言葉はとても広く、我々は環境省が政策として扱っている環境問題を中心に研究しているが、国民にとって、地域社会で暮らしている人々にとっての「環境」は、これよりもはるかに広い。福島で暮らしているステークホルダーの皆様は、まさに環境省が政策として扱っている環境問題よりも広い環境問題にたくさん直面されているのだと思う。

福島拠点だけではなく、国環研全体で、それぞれがターゲットにしている環境に関して、様々な立場の人のご意見を聞きながら、これから我々が何をしていくべきかということを通じて学んでいくべきだと思うし、ステークホルダー会合はそのための良い機会になると思った。

・楽しさ、美味しさの話題でいえば、福島拠点では淡水魚や山菜の研究もしている。放射性物質汚染の負の側面も学びながら、でも、おいしいものを食べるなど、そのような組み合わせは、様々なところで考えられるのではないかと思います。

・学びのフィールドとしての福島の面白さを、県外の子どもたち・大人に伝えて来てもらう取り組みも重要。

・「山の学校」の良さは、多様な立場の人たちが語り合って、その中で普段は味わえないような面白さを感じ得るということだと思う。福島拠点が地域協働研究をする重要性に、地域協働研究をすることによって研究の面白さを再認識できるという側面と、新たな研究の面白さを発見できるという二つの側面があるのではないかと考えている。

「面白さ」が、本日の会合のキーワードだった。国環研・福島拠点の研究者それぞれが面白さを実感して研究をすることがやはり大事で、それがまさにいい研究、社会に役立つ研究にもなる。ぜひ本日、参加していただいているステークホルダーの皆さま方にも研究者の研究を見守っていただき、支えて、一緒に仕事をしていただいて、対話していただければ有難い。そのような関係になっていただけると有難い。



第二部・ステークホルダーの皆様と福島拠点研究者の座談会の様子（会場全景）

8. 本会合をうけた国環研・福島拠点および地域協働推進室における今後の取り組み

- 本会合でステークホルダーの皆様から頂いたご意見から、2011年の東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故の影響が未だ続く福島県において、放射能汚染からの環境回復や環境創生に携わる研究者、研究機関に対して、本務としての研究活動だけでなく、継続的な放射線教育やメディアリテラシー向上への具体的な貢献や、地域と顔の見える関係づくりや、環境に係る専門知を地域の人々に伝える場づくりへの積極的な参画が求められていることが示唆された。
- さらに国環研福島拠点に対しては、サイエンスの立場から長期的な社会のあり方を構想しつつ政策や地域の対話に参画すること、次期学習指導要領にてさらなる推進が予想される総合的な探究の時間への対応に貢献すること、国環研・福島拠点が蓄積したデータを民間企業に活用してもらうための仕組みづくりを行うことなど、今後の福島拠点における地域協働研究のあり方について様々なご意見をいただくことができた。
- 本会合では多くの国環研・福島拠点の関係者が、こうしたご意見を直に伺うことができ、非常に貴重な機会となった。本会合でステークホルダーの皆様からいただいたご意見を受けて、今後、国環研・福島拠点は下記の取り組みを実施できるのではないかと考えた。
 - ① 個性化する子どもたち（次世代）のニーズに対応する多様な環境問題の学び方、学びの仕組みを提案する
 - ✓ 個性化する子どもたちの探究学習への支援
 - ✓ 子どもたちにとって身近な暮らしの課題（ごみ問題）と地球規模の環境問題を結び付けて提示。ゼロカーボン×〇〇という提示の仕方も
 - ✓ 子どもたちの様々な発達段階・科学への理解度・学力レベルに応じた多様な企画・コンテンツを提供
 - ✓ 「変なおじさん」「変なおばさん」としての研究者の仕事の面白さそのものを発信する企画・コンテンツを提供
 - ✓ 探究学習支援に取り組む大学・研究機関、自然体験を企画・実施する団体、コンテンツ制作のプロなど、同様のニーズに対応し、近い問題意識や専門性をもっている団体・組織とのコラボレーションも有効
 - ② 様々なステークホルダーと連携して、国環研・福島拠点の研究の知見・データを活用した新たな企画・コンテンツを提供する

- ✓ 企業と連携して、「楽しさ」「美味しさ」を入り口にした企画・コンテンツ作りに貢献。国環研・福島拠点が実施している山菜・きのこ、淡水魚など、美味しいものを食べながら、放射線災害の影響について知っていただく企画・コンテンツも
 - ✓ 理数系が苦手な大人を対象にした企画・コンテンツ、リサーチリテラシーのビジネスへの活用に貢献する企画・コンテンツも
 - ✓ 国環研・福島拠点の研究を企業など、様々なステークホルダーが知る機会を設けることも重要
 - ✓ 住民参加型の情報発信のあり方も検討する
- ③ 科学の立場から長期的な視点で社会のあり方を構想しつつ、協働のパートナーとして、地域の政策や対話に参画する
- ✓ 短期的・中期的な環境政策への貢献だけではなく、福島をフィールドとする地域協働研究の知見をもとに、長期的な社会構想を提示する
 - ✓ 福島で活動する環境研究機関として、地域協働研究の理論を提示すること（何のために地域協働するのか、なぜ地域協働の必要があるのか、地域協働をどのように進めていくのか）が必要。地域協働研究を学術的レベルにまで昇華して、学術論文になるような成果を生み出し、発信する
 - ✓ 従来の災害環境研究で取り組んできたテーマ（環境回復、環境創生、災害環境マネジメント）ではないが、福島の復興・再生において重要なテーマにも挑戦する。利害対立を前提とした合意形成プロセス、災害の記憶・教訓の伝承、福島復興指標、福島・浜通り地域の教育・福祉など。
 - ✓ 自治体やステークホルダーの「御用聞き」「便利屋」になるのではなく、自治体やステークホルダーが望まないこと、認識していないことでも、長期的な視点で環境・社会にとって必要なことがあれば、積極的に提言する
 - ✓ 福島・福島県内の自治体に深く関わりながら、福島県の特定の地域で培ったスキルを、福島県内の他地域や福島県外の地域における課題解決にどのようにつなげていくのかを、その方法を具体的に考える
 - ✓ 多様な立場の人たちが環境や社会の課題・問題について意見交換・対話をする場づくりを担うとともに、こうした活動に取り組むステークホルダーの取り組みを積極的に支援する
 - ✓ 他機関とも連携して、浜通り・中通り・会津に散在している地域をつなぎ、ネットワークをつくる役割を果たす
 - ✓ 地域協働研究のフィールドとしている地域と、他の地域をつなぎ、地域のステークホルダーのネットワーク拡充に貢献する役割
 - ✓ 他機関と連携して、福島復興研究・地域協働研究の人材育成に取り組む

また、本会合の開催後、会合の結果の活用状況を振り返る自己点検を行う目的で、福島拠点・地域協働推進室はステークホルダーの皆様に対して、毎年度の活動報告を行う予定である。

以上

令和 6 年度
国立環境研究所福島地域協働研究拠点
ステークホルダーとの対話のための会合
報告書

発行 2025 年 7 月

筆者

令和 6 年度国立環境研究所福島地域協働研究拠点ステークホルダーとの
対話のための会合 運営事務局

辻岳史（国立環境研究所福島地域協働研究拠点 主任研究員）

常盤達彦（国立環境研究所福島地域協働研究拠点 高度技能専門員）

伊藤由美子（国立環境研究所福島地域協働研究拠点 高度技能専門員）

吉村篤彦（国立環境研究所福島地域協働研究拠点 総務企画課 係長）

成田瑞穂（国立環境研究所福島地域協働研究拠点 総務企画課 係員）

写真撮影・提供

志賀薫（国立環境研究所企画部広報室 高度技能専門員）

発行所 国立環境研究所 福島地域協働研究拠点

〒963-7700 福島県田村郡三春町深作 10-2

福島県環境創造センター研究棟

電話 0247-61-6572

<https://www.nies.go.jp/fukushima/index.html>